

今夏～秋、熱中症や豪雨に注意を 防災62学会がメッセージ

社会 | 速報 | 気象・地震

毎日新聞 | 2023/6/12 17:26(最終更新 6/12 17:26) 613文字



豪雨で冠水した市街地＝愛知県豊橋市で2023年6月3日午前9時25分、本社ヘリから加古信志撮影

北海道を除く全国が梅雨入りしたのを受け、日本気象学会や日本災害医学会など防災に関わる62の学会でつくる「防災学術連携体」の幹事会が12日記者会見し、夏から秋にかけて高温による熱中症や豪雨災害に注意を呼びかける市民向けメッセージを発表した。

気象庁によると、7、8月の平均気温は、東日本と西日本で平均並みか高く、沖縄・奄美で高くなる見通しだ。総務省消防庁によると、今年の熱中症による救急搬送者(5月1日～6月4日)は4152人(速報値)で、昨年(確定値)の3541人よりも600人以上多い。

6月は梅雨前線と台風2号の影響で、四国や関東などの広い範囲で豪雨に見舞われた。幹事会によると、日本列島は南からの暖かく湿った空気が流れ込み、低気圧や前線の影響を受けやすい状況にあり、豪雨災害にも備えが必要だ。

記者会見した日本気象学会の中村尚・東大教授は「猛暑日や熱帯夜は年々増えており、日本近海の水温も上がっている。それを反映して大気中の水蒸気も増えつつあり、時間降水量80ミリを超えるような猛烈な雨や、1日400ミリ以上の豪雨の年間観測数も長期的には増加傾向にある」と指摘した。

日本救急医学会の横堀将司・日本医科大学教授は「体が暑さに慣れる『暑熱順化』ができないうちに外気温が急激に上がると熱中症が増える。高齢者や屋内での発症が多いのが日本の特徴で、見逃さないで市民全体で守っていく取り組みが必要だ」と話した。【垂水友里香】